

メッセージアウトライン コリント人への手紙 第一12:13~27 「キリストのからだである教会」

[13]「私たちはみな、ユダヤ人もギリシア人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によってバプテスマを受けて、一つのからだとなりました。そして、みな一つの御霊を飲んだのです」

これは単に形式的な水のバプテスマのことではなく、御霊の働きの支配下に生きる者となったことを示している。→ヨハネ3:5 「一つの御霊を飲んだのです」とはイエス・キリストを信じた人種、国籍、地位、立場によらないすべての人に御霊の賜物が与えられたことを言う。→12:4~12 その目的は「一つのからだとなる」ためであった。皆がバラバラで勝手なことをするためではない。

[14]「実際、からだはただ一つの部分からではなく、多くの部分から成っています」

ここでは12:12節の表現の再確認がなされている。

[15-16]「たとえ足が『私は手ではないから、からだに属さない』と言ったとしても、それでからだに属さなくなるわけではありません。たとえ耳が、『私は目ではないから、からだに属さない』と言ったとしても、それで、からだに属さなくなるわけではありません」

手と足を比べれば、手の方が色々なことができ、よく目立つ。しかし、足がなければからだを支えることはできず、移動することもできない。もしパウロに足がなかったならば世界を駆け巡った福音伝道はできなかったであろう。目は何でも見ることができるが耳はできない。だからからだに属さないと言うことはできない。耳には耳にしかできないことがある。信仰は聞くことから始まる。→ローマ10:14,17

信仰者は自分の賜物を人と比べて、卑屈になって自分は教会に必要な存在だと思ってはならない。また賜物を誇って高慢になってもいけない。

[17]「もし、からだ全体が目であったら、どこで聞くのでしょうか。もし、からだ全体が耳であったら、どこでにおいを嗅ぐのでしょうか」

教会において一人ひとりとはみな違う。それゆえ他の人と全く同じようになりたいと思うのは正しいことではない。それぞれが異なる賜物、持ち味があ

る。

[18]「しかし実際、神はみこころにしたがって、からだの中にそれぞれの部分を備えてくださいました」

ここは12：11節を別のことばで表現しているところである。

[19]「もし全体がただ一つの部分だとしたら、からだはどこにあるのでしょうか」

どれだけ重要と思われる部分も、それだけではからだを構成することはできない。からだ全体が目、からだ全体が手、からだ全体が頭。しかし、それでからだの全部とは言えない。人間のからだも教会もこの点で同じである。

[20]「しかし実際、部分は多くあり、からだは一つなのです」

教会は手、足のような人も、目、耳のような人もみな必要であり、それぞれが与えられている御霊の賜物をもって主のために奉仕することが大切である。そのような一人一人によってキリストのからだなる教会が構成されていくのである。→エペソ4：16

[21]「目が手に向かって『あなたは知らない』ということはいできないし、頭が足に向かって『あなたがたは知らない』と言うこともできません」

目は心の窓と言われるほどからだの中では美しい部分である。旧約の雅歌4：9では愛する者のただ一度のまなざしが私の心を奪ったと書かれている。目は実にはからだの中で目立つ存在である。また頭もからだの一番上にあり、目立つ。しかし、だからと言って目が手に向かい、頭が足に向かい「あなたは知らない」と言うことはできない。

イエスの弟子たちの間でだれが一番偉いのだろうか、という議論が起こったことがある。しかもそれはイエスがその夜捕らえられるという最後の晩餐の席上でのことであった。いかに弟子たちがイエスの心の思い、苦しみを知らずに自分のことばかり考えていたかが分かる。このような弟子たちのやり取りに対してイエスが教えられたことが、ルカ22:25~27である。→「すると、イエスは彼らに言われた。『異邦人の王たちは人々を支配し、また人々に対し権威を持つ者は守護者と呼ばれています。しかし、あなたがたは、そうであってははいけません。あなたがたの間で一番偉い人は、一番若い者のようになりなさい。上に立つ人は、給仕する者のようになりなさい。食卓に着く人と給仕する者と、どちらが偉いでしょうか。食卓に着く人ではありませんか。しかし、わたしはあなたが

たの間で、給仕する者のようにしています』

イエスはこのように誰が偉いかと各々が自分を誇り高ぶるのではなく、自分を低くする者、謙遜な者にならなければならないと教えている。
[22]「それどころか、からだの中でほかより弱く見える部分が、かえってなくてはならないのです」

「からだの中でほかより弱く見える部分」とはどこか。それは外からは見えない内臓器官とも考えることができる。しかし、心臓、肝臓、腎臓、肺、胃腸などは手や足に比べるとかえってなくてはならないものである。片手や片足がなくても生きていけるが心臓や肺がなくては生きていくことはできない。内臓は普通見ることも触ることもできないが、実は非常に重要な器官なのである。このようにパウロはコリント教会の各人の賜物をからだの各部分にたとえて、実はほかより弱く見える部分がかえってなくてはならない部分であることを教える。

[23-24]「また私たちは、からだの中で見栄えがほかより劣っていると思う部分を、見栄えをよくするものでおおいます。こうして、見苦しい部分はもっと良い格好になりますが、格好の良い部分はその必要がありません。神は、劣ったところには、見栄えをよくするものを与えて、からだを組み合わせられました」

弱い内臓は強い骨でもってこれを囲み、厚く柔らかい肉のクッションで包み、丈夫な筋肉と皮でおおわれている。これは弱い部分に対する神の配慮である。顔などのような格好の良い部分はその必要がない。神は格好の良い部分やそうでない部分にこのような配慮をもって調和させてくださっている。からだのどの部分も必要な部分である。「あなたは必要ではない」「あなたはいらぬ」という部分など一つもないのである。そしてこれはキリストのからだである教会のことを言っていることに気がつかなければならない。

[25]「それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いのために、同じように配慮し合うためです」

からだの各部分が分裂して争っていたらどうだろう。右足と左足が違う方向に行こうとし、右手は箸を持ち、左手はフォークを持ち、胃腸は消化することを拒否し、肺は呼吸することをやめる。このような状態になったならば人は死んでしまうであろう。

からだに様々な部分があるのは分裂し争うためではなく、調和をもって各部分が配慮するためなのである。からだのどこかが傷ついたり血が出たりするような時はただちにからだ中の組織がそれに反応する。有害な細菌を殺すために白血球がそこに急行する。傷口はやがてふさがり、新しい肉と皮がその部分をおおう。右手がけがをしたら左手が代用する。このようからだは実に調和しており、各部分が緊密な連携をもっていたわりあっている。キリストのからだである教会もこのようであればならないのである。

[26-27]「一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。あなたがたはキリストのからだであって、一人ひとりはその部分です」

「使徒の働き」12章でペテロがヘロデ王に捕らえられた時、ほかのクリスチャンたちは何をしたであろうか。次は自分の番かもしれないと思い逃げたか。信仰を捨てたか。

そうではなく、ペテロがこの状況から救い出されるように、皆で心を合わせて熱心に神に祈っていたのである。パウロが伝道先で食べる物にも事欠いていた時にピリピの教会は彼の欠乏を補うために援助した。→ピリピ4:14-18 彼がローマの牢獄にいた時にはわざわざ捜し出して励ましてくれた。→Ⅱテモテ1:16-17

このように苦しむ者。悩む者、痛みを覚えている人々を他のクリスチャンたちがその重荷を担い、助け、強め、励まし、喜ぶ者とともに喜び、悲しむ者とともに悲しむ。そのように一人ひとりがキリストのからだである教会の部分、部分としてその役割を果たしていくことが教会のあるべき姿なのである。

コリント教会の人々はさまざまな賜物に恵まれていたが、かえって分裂し争っていた。

彼らはパウロのこのような勧めを聞いて心を探られたことであろう。

「あなたがたはキリストのからだであって一人ひとりはその部分です」私たちが年の初めにこのことばをじっくり味わって、互いにいたわりあい、助け合い、調和を保ち、キリストのからだである教会を正しく立て上げ、神の栄光をあらわすものとなっていきたい。